

分野	演 題	講 師	職 名	内 容
交 通	高齢者への交通安全教育 （歩行者編・ドライバー編）	正岡利朗	高松大学経営学部教授	香川県では、交通安全教育に設立した動画教材シリーズを作成しています。このうち高齢者用の教材としては、歩行者編、ドライバー編が制作され、この監修にかかわっていますのでこの教材を用いた講義をすることができます。教材中には、「体操コーナー」等もあるので、講義室は、立ち上がって動ける程度のスペースをお願いします。
	運転についてのマナーアップ教育	正岡利朗	高松大学経営学部教授	悪いといわれている香川県の交通のマナーをどうすれば改善できるのか考えましょう。
歴 史	「讃岐三白」という言葉は意外と新しい	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	香川県の代表的な産物として、現在は「讃岐うどん」が大変有名となりましたが、かつては「讃岐三白」という言葉がよく使われていました。一般に江戸時代から讃岐では「讃岐三白」が盛んに作られたと伝えられていますが、実はそうではなく、この「讃岐三白」という言葉が、一体いつごろから使われ始めたのか、また、なぜそのころから使われ始めたのか、などについて、その時代背景を含めて、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。
	「こんぴらさん」はどう歌われたか	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	「歌は世につれ、世は歌につれ」と言われるように、江戸時代の流行唄も時の政治や生活文化、時代の雰囲気などに影響を受けてきました。今回は、金毘羅信仰が江戸庶民歌謡の中でどのように取り上げられ、時代とともにその性格を変化させていったかを追ってみたいと思います。例えば、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』には、明和・安永期に江戸で流行した「金毘羅唄」の節が出てきます。このほか「金毘羅天狗の唄」「金毘羅願掛け唄」「銀のびら」など、「金毘羅船々」以前にも数多くの金毘羅庶民歌謡があったことが分かっていきます。
	讃岐の特産品にはこんなのがあった ―将軍献上品と讃岐の特産品―	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	江戸時代には、各藩の大名が毎年季節を決めて領内の産物を将軍家に献上していました。これを「時献上」といって『大名武鑑』などの書物にその産物名が記されています。また、江戸時代に編纂された『宝鑑集覧』や『西暦寄書』などの地誌類にも、野菜や果物など領内各地の特産品が載っています。これらから、讃岐には江戸時代にはどのような特産品があったかが分かります。その中には、高松藩の三大名物野菜や平楽町が産出した金毘羅生姜などがあり、讃岐の伝統野菜として「それだじけいん」香川県）の二つに挙げてもよい地域の産物がたくさん出てきます。最後にうどんの話もします。
	文化財でたどる 讃岐香川の歴史と文化	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	香川県内にはたくさんの文化財が残っています。その文化財を時代や地域ごとにたどって、皆さんと一緒に「讃岐香川の歴史と文化」を訪ねてみたいと思います。改めて土曜日の文化財を一つひとつ取り上げて見ると、その背後にふるさととの自然や文化、歴史や文化、ふるさとの人々たちの生活の様子などに対する思いが知ることができそうです。身近なところに意外な文化財があることに気がついたり、ふるさとや文化財に対する見方が変わったりして、よりふるさとに対する愛着が増えるのではないかと期待しています。
	大名家の交友関係と武家儀礼 ―高松松平家の場合―	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	江戸時代の大名の主な仕事に「公勤公納と内外交際」の二つがあります。将軍家や幕閣の政治動向を的確に把握するために、普段から親しい内外の大名との交際を通じて情報を収集しなくては必要があったのです。高松松平家と親しい関係にあった大名は家老大など、また交際相手として、下層儀礼や服忌送儀礼などのようにして、日本の贈答文化や喪応儀礼の源流を辿りながら、現代における儀礼の役割などについても一緒に考えてみたいと思います。
	世界遺産と四国道路	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	現在、日本には25件の世界遺産がありますが、唯一四国だけ世界遺産がありません。そこで四国四県が合同で「四国道路」の世界遺産登録に向けた取り組みをしています。この機会に、そもそも世界遺産とは何かについて、皆さんと一緒に考えてみましょう。世界遺産とは、ユネスコが行う3大遺産事業 ①世界遺産②無形文化遺産③世界の記憶の1つで、世界の貴重な財産を人類の宝庫として後世に伝えるという運動です。
	死生学からみた「この世」と「あの世」	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	人の「死」をどう考え、どう取り扱ったかをみれば、その社会の仕組みやものの考え方がよくわかるかと言われます。江戸中期以降、重要な人物の死に際して、領内に火ノ元を入念にするなどにも、鳴物・音請・暮・放生禁断・魚鳥売買が停止され、同じ名前の呼び名や文字が禁止されるなど諸事に関する禁忌・遠慮令が出されたのはなぜか、また服忌令で喪に服すべき親族の範囲と期間が定められ、先祖祭祀や墓石建立が盛んになるといえるのはなぜなのか、「この世」と「あの世」を結ぶ葬送儀礼や先祖追善供養儀礼などについて一緒に考えてみたいと思います。
	君の名は（日本人の名前学） ―名前に刻まれた日本の歴史と文化―	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	源義経は、父義朝の九番目の男子だったので「九郎判官義経」と呼ばれていました。それでは屋島の源平合戦で源の将を討つた源頼朝は、那須の家族資産の何番目の男子だったのでしょうか？正解は―十一番目です。『与一』の与は和泉という意味で、―与一―と名乗ったので、この調子で続けたら、十二番目以降は『与（余）次郎』『与（余）三郎』となります。歌舞伎役目でも有名な「お富と三郎（切腹と与三）」の与三郎は十三男ということになります。このような名前をつける方法（名は「このうめ」といいます。日本人の名前の歴史について、一緒に考えてみましょう。）
	人生の三惑王をめざして ―超高齢社会の生き方で大切なことは―	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	日本は世界に先駆けて超高齢社会となり、これまでは通って新しい高齢者像や生き方を求められています。生涯学習の学を提唱した「ルネサス」人生第4期論や発達心理学者エリクソンらの心理社会的発達理論の第9段階、社会老年学の創始者トーンズたちの歳を重ねるほど幸福感が上がるという老後の超経、ユネスコ21世紀教育国際委員会パロール報告の「学習の4本柱」などを例に、これからのシニア層の生き方と共に学ぶことの大切さについて、皆様と一緒に考えてみたいと思います。
	地域住民ガイドが案内する 「まあるき・しまあるき」の楽しみ方	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	香川県内の各地域にはそれぞれ独自の歴史や文化が根付いています。「まあるき・さとあるき」の楽しみは、小さな旅で大きな発見ができることです。現地を実際に歩いてみると、今まで気づかなかったことに気付いたり、新しい発見があります。例えば、中世讃岐の湊町には、それぞれ違った成り立ちがありますが、共通したところもあります。それは、発展の歴史や経済情勢などです。現在、交通手段がある地方都市や地域社会の活性化や地方創生に活かせるのではないかと思います。皆様と一緒に紙面上で県内各地域の「まあるき・さとあるき」をしてみたいと思います。
	讃岐香川のご当地ソング・庶民歌謡史	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	NHK連続テレビ小説「エール」のモデルとなった作曲家古閑裕而さんの作品が香川県内に存在します。昭和24年の観光高松大博覧会PR曲「高松広域」と昭和26年制定の香川県歌「讃岐の国」を代表する香川県の歌として、昭和30年代に香川県内に愛唱された歌があります。古代から現代まで私たちの先輩たちが口遊んだ庶民歌謡の数々を皆さんと一緒に追ってみたいと思います。いわば「庶民歌謡でたどる讃岐香川の歴史」です。
	讃岐とキリシタン	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	フランスコゼビエルの来日（1549年）から1世紀の間は「キリシタンの世紀」といわれ、日本にキリスト教が伝わり、日本の社会や文化に大きな影響（バリエーション・バクト）を与えた。讃岐では、1574年に建てられた最初のキリシタンが生まれ、1586年から小豆島がキリシタンの島として知られるようになります。1606年頃には讃岐本島土佐藩にもキリシタンが数見せられたようになった。特に讃岐は四国のキリシタンの拠点として多数のキリシタンがいた。これに対して、幕府や諸藩はどのような意図をもって取り締まっていたのか、その過程を辿ながら、当時の社会情勢や讃岐とキリシタンとの関係を皆様と一緒に探ってみたいと思います。
	「郷土」とは何か ―私たちは「郷土」をどう学んできたか―	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	香川県において、地域性を重視した教育が昭和初期の郷土教育運動を中心としてどのように行われてきたかを、その前史である江戸時代の地誌学習や後史である昭和の中後期の郷土学習・地域学習、平成期の郷土教育学習、令和期のまちづくり学習などとして、地域を重視する現代社会の中で、若く青年期の学校教育のみならず、成人期の社会教育も含めて総合的に、今後、「下からの歴史学」という視点から、郷土（地域）をどう教養、伝えに行ったらよいかを一緒に考えてみたいと思います。
	栗林公園の歴史と文化	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	現在の栗林公園は、明治8（1875）年に県立公園として一般に公開され、昭和28（1953）年には国の特別名勝に指定されるなど、回遊式の大名庭園として今や日本が世界に誇る観光地となっています。しかし、それ以前の歴史については、まだ分かっていないところがありますが、皆さんと一緒に栗林公園の起源やその後の変遷などについて史料をもとに考えてみたいと思います。
	高松城下事件簿	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	「高松藩御令様之内書状」（讃岐高松藩初代藩主松平頼重～9代松平頼重までの法令集）を通して、江戸時代の高松城下で、どのような事件が起こったか、また、当時の城下町の成り立ちや社会の仕組み、城下町高松の武家・町人の暮らしぶりや風俗の様子等を皆様と一緒に探ってみたいと思います。
	讃岐武士の文化力と贈答・儀礼活動	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	中世社会の特徴は、分権的・多元的で絶対的な優位性を持つ支配者が存在しなかったことで、それ故に贈答儀礼が最も肥大化した時代だといえます。その中で讃岐の武士たちは、在地寺社の法会等の礼儀を通して連歌・猿楽・白拍子・絵・特産品など様々な贈答儀礼を行うことによって、在地支配の基礎となる族長的（横の）主従制（縦の）人間関係を構築していきまし。讃岐の代表的な個人である安富・香川・香川・秋山氏などの事例をもとに皆様と一緒に探ってみたいと思います。
	NEW 字・コミュニティ史編纂さんと地域づくり	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	人口減少時代を迎えて、香川県内では住民同士の間関係が希薄化し、地域組織や地域行事等の地域活動も維持しにくく、地域の現状が厳しい。このような現状と課題解決のために、地域住民が主体となって住民に身近な字（あざ）史やコミュニティ史（史跡）の調査と活用を通して、地域を深く知り、地域に愛着、誇りを持つ（住民づくり）と住民が主体となった地域づくり）に成果を上げている地域を紹介するとともに、これからの地域づくりに必要なものは何かについて、皆様と一緒に考えてみたいと思います。
	NEW 讃岐の鷹狩文化	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	古代日本には鷹は「魂の鳥」、中世には「神の化身」として神前に献る「神鷹」の思想が生れた。鷹狩は「遊鷹」（みかり）と読まれる伝統であり、国家主権の一部として鷹の鷹狩権と山林支配権は天皇家にあったが、中世以降、武家政権に継承されていった。讃岐の中世武政の中には香川・香西・秋山・多田氏や多度津雅家助・大林三左衛門・羽床伊豆守政成などが鷹の道に通じており、近世には鷹匠として鷹・松平氏などの家臣団に編制され明治維新まで活動していた。このように、かつて盛んであった讃岐の鷹狩文化について、皆様と一緒に探ってみたいと思います。
	NEW 初代高松藩主松平頼重は なぜ頼朝と鷹狩に熱心だったのか	清洲利博	元高松大学教授 （現：高松大学非常勤講師）	初代藩主松平頼重の行動は、『英名日暦』などの日・英記録簿に記録されていますが、その中で目立つのが、「遊鷹」や「舟遊」などの鷹狩や鷹狩が多いことである。なぜ松平頼重がそれらを多く行なったのかを、頼重の行動特性とともに、その行為の背後にある政治文化的意義や讃岐の地域社会との関係性に触れながら、それらが頼重主権の強化や